

第3回「核なき未来」オピニオン U-30 の部 優秀賞作品

核兵器を所有する宇宙船地球号乗組員の皆様へ

岡本 沙紀

今年の夏は、災害級と言われるほどの記録的猛暑が続いています。メディアでは連日熱中症による搬送者・死者の報道がされており、また私たちの誰も他人事ではなく、自身の体の不調や身近な人に降りかかる困難としてこの猛暑を経験しています。この異常な暑さは、地球温暖化の結果にほかなりません。私たちは、人間活動によって地球環境が大きく変化していることを目の当たりにしています。地球科学の分野では、「人新世」という新たな時代区分が提唱されました。人類の影響が地球規模で無視できないほど大きく、恐竜の出現や氷河期の終了と同程度に重大な事象が起きていると考えられているためです。

意外なことに、人新世の始まりは人口爆発や産業革命などではありません。始まりの定義は1954年、ビキニ環礁核実験以降とされています。ビキニ環礁核実験は、人間が地球につけた痕跡の中でもっとも恒久的に残る顕著なものだからです。すなわち、核の使用は人間活動の中で最も破壊的で愚かな行為であるといえるでしょう。

私は幼い頃から川で遊ぶのが好きで、自然の中で過ごすことに喜びを感じていました。その結果、地球科学に対する興味が自然に芽生え、大学での専門分野として地球工学を選びました。地球科学に取り組むときにいつも思い出されるのは、3.11の東日本大震災の際のことです。放射性物質の影響が広範囲にわたることを知り、屋外で遊ぶことに神経質になる人が数多く見受けられました。当時小学生だった私自身も、放射性物質による大気や土壌の汚染についてのニュースを見て、本当に外で遊んでいいのか、雨水や川の水に触れるのは危険なのではないかと底のない恐怖を感じました。放射能が特に恐ろしいのは、人間の目に見えないという特徴を持つ点だと思います。いつしか地球科学に対する興味は、純粋な憧れや愛着のみならず、海流やジェット気流の速度など日常生活からは全く想像のつかない規模で恐ろしいものが地球を駆け巡ることについて適切な理解をしたいという気持ちをはらむようになりました。

大学で水循環について学んで驚いたことは、あまりに多くのデータでビキニ環礁核実験の痕跡が認められたことです。特にサンゴの年輪や氷床に蓄積された分子から地球上の水循環の経路を調べるトレーサー水文学の分野で研究をする中で、オゾンホール破壊や地球温暖化などの他のどんなイベントよりも明確なシグナルが現れるのが核開発の年代の層です。核の使用が地球全体の水循環や気候システムに与える影響は、これほどまでに明白なのかと改めて衝撃を受けました。

地球が「命の惑星」と呼ばれるほど豊かな生態系を擁する天体となったことはさまざまな偶然が重なった結果ですが、特に不可欠だった条件のひとつに、宇宙からの放射線を防ぐほどの厚い大気があります。その奇跡を無駄にするような行為、すなわち地球上に放射線を撒き散らし何億年もの影響を残す兵器を人間の争いの解決手段として用いることは、あまりにも無責任で到底容認できない選択肢だと考えます。このような兵器は、私たちの唯一の住処である地球を無責任に破壊するものであり、すべての生き物の将来の世代に対する重大な裏切りです。

第二次世界大戦以降、核の所有や開発が加熱しはじめました。その痕跡は80年以上経った今も消えない事実があります。この現実を踏まえて、私たちは反省し、破壊に頼らない関係構築を目指すべきです。核兵器はその存在自体が人類と地球の未来に対する脅威であり、平和のための手段にはなりません。私たちは、核兵器に依存する政策から脱却し、持続可能な未来のために努力しなければなりません。経済的にも、核兵器の維持にかかる膨大なコストを平和的な用途に転用することで私たちの社会全体に利益をもたらすでしょう。

核兵器の所有はあくまで「抑止力」とであると主張する人がしばしばいます。しかし、実際に広島と長崎に使用されたことがあるのです。所有していればまたいつか実際に使用されることは明白でしょう。また、その破壊力は取り返しのつかない被害をもたらすものだという人も人類はすでに知っています。どうか、「人新世」をこれ以上愚かな破滅の時代にしないために、皆で核兵器を放棄し前に進みませんか。